

【パラハートちょうふ 2020 とは？】

パラリンピックイヤー2020年の市のキャッチフレーズ、「パラハートちょうふ 2020」の「パラハート」とは一体何か。

市内のきょうだい児からは、学校のパラリンピック教育でなぜ知的障がい者との交流はないのかとの疑問の声が上がっている。パラリンピック教育が打ち出す障がい者像や障がい理解は限定的なものであり、多様な当事者の姿や、当事者が求める共生社会のあり方とは乖離がある。

共生社会作りの目標は、障がい特性を持ちながらも、その人がそのままの姿で受け入れられ、自分が望む幸せを、自分の望む方法で求めることができる社会ではないか。

また、障がいは人々の特性に付随するものではなく、社会が生み出すものである。バリアフリー化はハード・ソフト面で進んでいる面もあるが、私たちの社会は、まだ多くの障がいを生み出している。生産性で人の価値を測る優性思想的な意識も根強い。このような厳しい現実の中、パラハート調布 2020 に込めた障がい者理解や共生社会のビジョン、その実現に向けた取組みを問う。

< 答弁 >

令和2年をパラリンピックイヤーとして、共生社会の素晴らしさを市民や市外から調布を訪れる方々が実感できる1年にしていきたい。年間を通して、様々な障害に対する理解を深めるべく、福祉やスポーツ、健康、教育、文化、環境、まちづくりなど、多岐にわたり事業を展開していく。

これまでも地域福祉計画、高齢者総合計画、障害者総合計画の福祉3計画共通の基本理念に共生社会の実現を掲げ、様々な障害への理解促進と社会参加の促進に取り組んでいる。また、調布市福祉作業所等連絡会をはじめ、障害当事者はもとより、多様な主体との連携、協働により、障害理解の一層の促進を図っている。本年のみならず、今後も、様々な機会を通じて、だれもが障害などにより分け隔てられることのない社会の一層の充実に向け、取組を推進していく。